

取手市埋蔵文化財センター第32回企画展

「昔の暮らし・古い道具」

平成24年7月23日(月)から9月21日(金)まで
午前10時から午後4時30分まで(入館は4時まで)

会期中無休／入館無料



牛に犁を引かせての農作業光景
(谷口昭進氏撮影、取手市教育委員会所蔵)



お歯黒のたらい(染野修家所蔵)



取手町役場で使用した手回し式計算機
(取手市教育委員会所蔵)

取手市埋蔵文化財センター

〒302-0007 取手市吉田383

TEL0297-73-2010

FAX0297-73-5003

開催にあたって

今回の企画展では、旧取手市・旧藤代町時代から収集してきた民具や農具などの古い道具から、私たちの生活がどのように変わってきたかを紹介いたします。今は使われなくなった道具、形が変わってしまった道具、形は同じでも材質の違うものなど、さまざまな道具の移り変わりから、私たちの生活の変化を見ていきます。

また機械化される以前の米づくりの様子を、古い写真や現物の農具で紹介いたします。かつて、「米」と言う字は分解すると「八十八」になる、米は農家の人が「八十八」もの苦勞をして作ったものだから、一粒でも粗末にはしてはいけない、と言われてきました。このことばも、最近では聞かれなくなってしまいましたが、かつての米づくりはそれぞれ「八十八」ではきかないくらいの苦勞の連続でした。これは、機械化された現在の米づくりでも同じと言えます。

これらの道具の移り変わりからは、日々の生活を送る中でさらにより良い生活を求めた先人たちの創意と工夫を感じ取ることができるのではないのでしょうか。

最後になりましたが、今回の企画展の開催にあたりご協力をいただきました関係各位にたいしまして、深甚なる謝意を表して開催のあいさつとさせていただきます。

平成24年7月

取手市埋蔵文化財センター

講演会

「布に映る人と暮らし ～布とつきあう、布を着尽くす～」

講師：宮本八恵子氏（日本民具学会理事）

日時：8月25日（土）、午後1時30分から3時まで（開場は1時）

公開講座（取手市郷土史研究会と共催）

「取手と藤代の暮らしの移り変わり」

講師：埋蔵文化財センター職員

日時：9月16日（日）、午後1時30分から3時まで（開場は1時）

講演会・公開講座とも会場は、井野公民館（井野2-17-17）会議室、定員90人（当日受付順）

駐車場が少ないので、公共交通機関をご利用ください

（取手駅東口から関東鉄道バス井野団地循環で井野公民館前下車すぐ）

民俗資料収蔵庫の特別公開（桐木1343、藤代中学校裏）

日時：8月10日（金）から12日（日）、午前10時から午後4時まで（入館は3時30分まで）

展示説明

8月4・5・18・19日、9月1・2・15・17日：午前11時と午後2時から

8月25日、9月16日：午前11時から 予約不要

例言

1. このパンフレットは、平成24年7月23日から9月21日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第32回企画展「昔の暮らし・古い道具」にともない、発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の飯島章が担当し、その他職員の協力を得ました。パンフレットの執筆にあたっては出典の注記は略し、主な参考文献の一覧をあげてあります。
3. この企画展の開催にあたり、次の方々からのご協力とご助言をいただきました（敬称略）。記して深謝の意を表します。なお貴重な資料をご寄贈いただきました方々につきましては、本来はお名前を明記しなければならないところですが、今回は割愛させていただきます。

大井寛、鴻野伸夫、染野修、竹内孝明、寺田勝、中村ヤヅ子、広瀬篤、谷口昭進
我孫子市教育委員会、市之代地区、流山市立博物館、龍ヶ崎市歴史民俗資料館

主な参考文献

『取手市史』民俗編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、近現代史料編Ⅰ・Ⅱ、通史編Ⅲ、『取手市郷土史資料写真集』、『藤代町史資料写真集 米づくり今・昔』、『藤代町史』通史編、暮らし編
茨城県立歴史館『特別展 祈りの歴史と民俗 絵馬』、龍ヶ崎市歴史民俗資料館『企画展 まで屋にあった農具』、鴻野伸夫『想い出の水郷』、小泉和子編著『ちゃぶ台の昭和』、『昭和優れもの図鑑』、『家で病気を治した時代 昭和の家庭看護』

7. 道具の移り変わり

かつての日本には、お歯黒の風習がありました。古くは男女を問わず身分の高い貴族や武士は、歯を黒く染めていました。江戸時代になると、結婚した女性が歯を黒く染めるようになりました。お歯黒は、酢酸に鉄を溶かした液体に、ふしこと呼ばれるタンニンを多く含む粉を混ぜて作ります。旧取手宿本陣には、お歯黒を付ける時に使ったたらいが残されています（写真は表紙）。

さて道具の移り変わりには、電気の使用が大きな影響をあたえています。取手では、明治43年（1910）9月に取手電燈株式会社に電気事業経営の許可が通信大臣から下りました。その後大正2年（1913）12月には、取手電燈株式会社は営業権を水海道電気株式会社に譲渡し、翌大正3年10月、取手町にはじめて電灯が灯りました。それまでのロウソクや行灯に比べて、格段に明るい電灯に接した人びとの驚きは、どのようなものだったのでしょうか。



行灯（あんどん） 油に火をともし照明としました。



ガンドウ ロウソクを使用した現在の懐中電灯にあたるものです。



ヒノシ 左の金属部分に炭を入れ火をおこし、着物や布のしわを伸ばしました。



燭台（しょくだい） ロウソクを立てて火をともし、照明としました。



炭火アイロン 形は現在のアイロンとほぼ同じですが、中に炭を入れて使いました。炭の火が消えないように後ろには空気の取り入れ口があり、煙突もあります。



電気アイロン 出始めのころの電気アイロンです。ヒノシや炭火アイロンと比べて、便利になってきたことがわかります。

最初は照明に使われた電気ですが、やがていろいろな電化製品が誕生してきます。ヒノシや炭火アイロンは電気アイロンに代わり、大正時代にはラジオ放送が始まります。人びとはラジオから流れる音楽や朗読劇を楽しみ、またラジオのニュースに耳を傾けました。そしてラジオは、大正時代が終わり昭和の新時代が到来したことを告げ、やがて日本の敗戦を伝えました。戦後になると、テレビが普及して娯楽や情報伝達の中心となります。しかし現在でも、ラジオ放送には根強い愛好者がたくさんいます。

また道具の移り変わりを見て行くと、形が全く違ってきたもの、形は同じでも材質が異なるものがあることがわかります。表紙に写真がある手回し式計算機は、数字にレバーをあわせハンドルを回して計算します。現在の電卓とは大分形が違いますが、昭和45年（1970）まで製造・販売されていたそうです。下の写真にあるレジスターも、形は現在のものとほぼ同じですが、大部分は木で作られています。1・2頁に掲載の資料は、特記されているもの以外は取手市教育委員会の所蔵です。



ラジオ 日本のラジオ放送は、大正14年に始まりました。



白黒テレビ テレビが急速に普及したのは、昭和34年の皇太子殿下（現天皇陛下）ご成婚の馬車行列が実況放送された時です。日本が戦後の混乱から立ち直り、高度経済成長期に入ろうとした頃です。



枕（染野修家所蔵） ちょんまげや日本髪を結った人が使う枕です。



英文タイプライター ワープロの普及とともに使われなくなりましたが、そのワープロもパソコンに取って代わられました。



レジスター 出始めのころのレジスターは値段も高く、実用品としてよりも商売が繁盛していることを示す信用の証のように扱われました。



家庭用置き薬 現在のようにすぐに医者にかかれない時代、業者が各家庭を訪ねて薬を置いていき、使用した分だけの料金を受け取りました。

2. 米づくりの四季

①四季農耕図の世界

四季農耕図とは、稲作の一年の作業を四季の移り変わりの中で描いたものです。

市内市之代の姫宮神社には、この四季農耕を描いた絵馬が奉納されています。小さい場面に大勢の人と多くの農作業光景を描き込んだためでしょうか、人・馬・土蔵・水田の大きさが不釣り合いですが、かえってほほえましい感じも受けます。裏面にも、彩色はされていませんが、表面とほぼ同じ図柄の四季農耕の絵が描かれています。

千葉県我孫子市中峠^{なかびょう}の旧家には、四季農耕の襖絵が伝わっています（写真は裏表紙）。この絵には、稲作のほかに麦の耕作も描かれているのが特徴です。特に田植えの時期は麦の収穫期と重なり、その忙しさは本当に「猫の手も借りたかった」と言われています。



明治30年 四季農耕図絵馬（市之代姫宮神社所蔵）



四季農耕図絵馬の裏面

① 種まき ② 鋤（クワ）をふるっての田起こし ③ 馬鋤（マンガ）を馬に引かせての代かき ④ 田植え ⑤ 稲刈り ⑥ 刈り取った稲の運搬 ⑦ 脱穀（干歯コキで稲穂から穀粒をもぎとる） ⑧ 籾摺りをして籾から籾殻を取り除き玄米にする ⑨ 唐箕（トウミ）で玄米と籾殻を選別する ⑩ 米を俵に詰める ⑪ 酒宴を催す男たち



②機械化される以前の米づくり

昭和31年(1956)、旧藤代町在住の写真家中村国利さん(故人)は、同じ藤代町の1軒の農家を取材し、1年間の農作業の光景を写真に撮りました。当時の農作業には、牛や馬の畜力が活用されるとともに、発動機を動力源とした機械が導入され始めていました。しかし現在とは異なり、農作業の多くは人力によって行なわれていました。

これらの写真は一見牧歌的に見えますが、春とは名ばかりの寒風吹きすさぶ時期に始まり、梅雨時の雨の中や夏の炎天下での1日中腰をかがめての作業と、体験した人でなければ言い尽くせない苦勞の連続を物語っています。4・5頁に掲載の写真は、すべて故中村国利氏撮影のもので、現在は取手市教育委員会の所蔵になります。



馬にバハを引かせての碎土。稲作りは、田起こしから始まります。牛に犁を引かせて土を耕し、乾燥させました(写真は表紙)。土が乾燥してくると、次に碎土を行ない、用水の引き入れに備えます。



転がしマンガを押しての人力での代かき。水を入れた田の土を、かき起こしてならすことを代かきと言います。牛や馬が入れない田では、人力で代かきをしました。



足踏み水車をまわして、用水路から田に水を引く。やや小ぶりの手でまわす水車もあり、こちらは子どもでも扱えるので、よく手伝いでまわしたそうです。動力ポンプが登場して、水車をまわさなくても水が田に引けるようになった時には、皆とても驚き喜んだそうです。



牛にハロウマンガを引かせての代かき。

田植え。田植えの時期は、夜の明ける前から苗代の苗を取り、それを田に運びました。6月の太陽の下、日が暮れるまで腰をかがめて苗を植え続けます。



除草機を押しての草取り。除草機を押して稲の間を進むと、歯が回転して雑草を取るとともに、土に日光があたり空気が入って、稲の生長が促進されます。見た目よりも力のある作業ですが、真夏に1日中腰をかかめでの草取り作業から、農家の人を解放した画期的な農具でした。



稲刈り。刈ったばかりの稲は水分を多く含んでいるので、乾燥させます。写真のようにそのまま田に並べて乾かすのを、刈干し(かつぼし)と呼んだそうです。



動力式脱穀機を使っでの脱穀作業。刈り取った稲穂から穀粒(籾)を取ることを脱穀と言います。発動機の回転をベルトで脱穀機に伝えて、脱穀作業を行います。



千歯コキによる脱穀。動力式の脱穀機ができる前は、千歯コキで脱穀していました。また動力式の脱穀機ができてからも、種籾は傷まないように千歯コキで脱穀したそうです。



万石通しを通った米を俵に詰めます。1俵は4斗入りで、重さは60キログラムです。

動力式籾摺り機による籾摺り。籾を摺って籾殻を取り除くことを籾摺りと言います。籾摺り機から出てきた米(玄米)は万石通しを通り、ここで小粒な米は網の下に落ちます。



④

③

②

①

四季農耕図襖(大井實家所蔵、写真提供 我孫子市教育委員会、写真パネルで展示します)

- ① 下の方は絵がはがれ落ちてしまっていますが、中ほどには、苗代作り・種まき・馬鍬を馬に引かせての代かきの場面が描かれています。
- ② 下半分は田植え、上半分は麦の収穫です。まさに農繁期そのもので、休む暇もありません。
- ③ いよいよ収穫です。今年も大豊作だったのでしょうか。稲を刈る女の人たちの動き、刈った稲を運ぶ男の人たちの足取りも、弾んでいるように見えます。
- ④ 下では藁の上で脱粒しない穂屑をくり棒で打っています。その上では、籾を藁に広げて乾燥させています。さらに場面が上に移ると、籾摺りが行なわれています。次は左下にきて、唐箕で玄米と籾殻を選別します。その右では、万石通して米と籾屑を分別します。こうしてできた米を俵に詰め、土蔵に収納します。



大日本人造肥料株式会社ポスター(竹内孝明家所蔵)

埋蔵文化財センター第32回企画展

昔の暮らし・古い道具

平成24年7月23日～9月21日

編集・発行 取手市埋蔵文化財センター 制作・印刷 (有)石山宣伝研究所